

心構えや経営管理の重要性を学ぶ。スマートな技術継承と若手農家の収益向上をJAが後押しすることで、就農者の定着につながり、地域の農業基盤を底上げしている。

青森・JA十和田おいらせ



育成塾の狙いは、農家の
ながいも育成塾で塾生に語
り掛ける寺澤部会長(左)（青
森県七戸町で）

収量は1、2割増えたと振り返る。塾を通じて同世代の農家と情報交換する機会も増えたという。大久保さんは「育成塾に参加してプラスしかなかった」と話す。

この品目別の育成塾には現在、5品目で102人が参加している。育成塾は1年で卒業するわけではなく、参加人数が毎年増えてい る。講師は現役の先輩農家。達人の技を習得しよう

JJA指導部の杉山憲雄課長は「品目別の育成塾とマネジメントスクールを両方受講して、農業の楽しさと所得の増大につなげほしい。数字を意識した農業の実践が必要」と話す。(次回は8日付)

青森県のJJA十和田おいらせは、品目に特化して營農の専門知識を学ぶ品目別育成塾と、経営感覚を学ぶマネジメントスクールの両輪でプロ農家の育成を進めていく。ナガイモから始まつた品目別は、二ニク、ゴボウ、ネギ、ピーマンに拡大。スクールでは、専門講師から経営者の

うで、普段感じている疑問を遠慮なく質問する。吉澤さんの一言一句に塾生は真剣な表情で、耳を傾けた。

から県と共同でながいも青成塾を主催。現在はJA単独で運営する。

他の農家の圃場を見て回つた。農家ごとにやり方が違うことを肌で感じたという。他人の圃場を見ることで視野が広がつた。育成塾ではそれができる。寺澤部会長は「若い間に正しい知識と技術をきちんと学んでほしい」と意識向上を訴え る。

ナガイモ収量15%増 品目別に塾 経営と両輪

法は」。4月中旬、七戸町塾。指導するのはJAな和夫さん(55)。塾生は、生産技術を高いレベルで平で開いた「ながいも育成がいも部会の部会長・寺澤寺澤さんの圃場(ほじよ)準化することだった。12年

要性を説く。20年前、自身
が就農する際、3年かけて

ると分析。また、「普段の食事で食べ、使った分

実の収穫適期や食品の劣化を、
で香氣を測定。香氣が通常の
ソーチップセンサーと比べて、
はるかに敏感な結果を得た。

のデータベース作成を進めていく考え方だ。

領、文在寅韓国大統領も電話で協議している。

J Aは若手農家の経営を
向上に向け、昨年9月か

日本農業新聞（全国版） 2018.5.5付 掲載